

麦跡まき秋どりえだまめの品種について

1 試験のねらい

53年から始まった水田利用再編対策により、野菜の作付けは増加しており重要野菜を含めて過剰基調にあるが、本県の地域特性をいかしながら産地の育成振興が図りうる野菜の一つとしてえだまめがある。麦の跡作野菜として適合し、しかも需要と価格が比較的安定しており有利性が見込める。しかし知見が少ないため、適品種について56年から58年に検討したので概要を報告する。

2 試験方法

下記のほかは当場の慣行耕種法によった。

表一 1 供試条件と耕種概要

年次	品種数	は種期	収	穫	密度 cm		規模
					畝幅	株間	
昭.56	27	7月7日	9月中旬	10月上旬	70	15	14 m ²
	57	6月25日	"	9月下旬	70	15	11 "
	58	7月13日	"	10月上旬	70	14	10 "

- 注1. ほ場は50年に水田を埋立した(客土は表層30cm)黒ボク土(壤土)。
2. 前作はいずれもビール麦。

3 試験結果及び考察

一般にえだまめの品種は、白毛で毛茸が少なく、粒が大きく(子実百粒重30g以上)、草姿は短茎で分枝閉鎖型(軍配又はうちわ型)が多く用いられてきたが、現在は袋づめによる販売が多くなったので、脱莢しやすく収穫期間が長い品種が望まれており、草姿よりはむしろ多収性が重視されている。また麦跡栽培は短日により開花が早まるため、生育量が大きい品種ほど適応性が高いと思われる。

これらの条件により適合した品種を検討した結果、3か年の成績から早生では華厳と銀秋が、中生では鶴の子(サカタ、渡辺採)、晩生では東山88号とフクユタカが有望であり、子実兼用種としては裂皮が少ない東京八重成(早生)、エンレイ(中生)、タマホマレ(晩生)が適品種と思われた。

華厳は短茎で分枝数が中位特に3粒莢が多い豊産種であり、銀秋は茎長は中位で分枝数は少ないが粒が大きい。収穫期間は華厳が8~10日、銀秋が13~18日であり、いずれもえだまめ専用種である。これに対し鶴の子、東山88号やフクユタカは長茎分枝開張型で生育量は大きく、着莢は良好であるが疎であり、収穫期間は14~18日で比較的長い。

いっぽう粒は中大であるが多収で裂皮が少ない品種を子実兼用として選定した。東京八重成が

褐目であるほかは白目であり、エンレイは県奨励品種に採用されており、タマホマレは西南暖地（群馬や千葉県を含む）を対象とした普及品種である。

これらから、収穫目標を8月下旬～10月上旬とした場合には、粒大や収量性からは晩生種ほど特性がいかされ適応性が大きいことになるが、は種時期が限定されるため（県南部では6月中旬～7月中旬）、連続出荷をねらいとした場合は2～3品種を選んだ作付け、またはは種期の移動による対応が必要である。

4 成果の要約

麦跡栽培で8月下旬～10月上旬どりを目標とした場合の有望品種には、華厳・銀秋（早生）、鶴の子（中生）、東山88号・フクユタカ（晩生）等があり、子実兼用種として東京八重成（早生）、エンレイ（中生）、タマホマレ（晩生）がよいと思われた。

（担当者 佐野分場 塩谷民一）

表-2 主要品種の成績（3か年平均）

品 種	収 穫 期	茎 長 cm	主 茎 節数	分 枝 数	莢 数 個/株	収量(kg/a)		子 実			
						茎重	莢重	へそ色	裂皮粒%	百粒重g	
早 生	華 厳(サカタ)	9月上～中旬	32	104	7.3	48	242	1069	無	30	303
	石毛25号(")	"	40	106	9.2	40	275	856	"	12	290
	東京八重成(協和)	"	39	108	7.6	48	247	998	褐	9	260
	銀 秋(武蔵野)	"	49	119	5.3	36	417	847	無	24	400
中 生	鶴 の 子(サカタ)	9月中旬	55	118	6.9	66	446	1021	無	17	327
	" (渡採種)	9月中～下旬	49	127	7.4	53	485	1003	"	19	357
	エンレイ(群馬農)	9月中旬	54	117	7.9	63	353	952	"	2	303
	ナスシロメ(黒磯分)	"	60	127	9.2	74	434	1040	"	29	263
晩 生	タマホマレ(長野農)	9月下旬	61	143	9.4	99	611	1222	無	2	293
	東山88号(群馬園)	9月下旬～10月上旬	68	139	7.9	65	789	1141	"	37	367
	フクユタカ(九州農)	10月上旬	71	158	13.2	90	965	1346	褐	35	345

注 東京八重成・フクユタカは2か年、石毛25号は1か年の平均値。